
淡い初恋物語

tapi@shu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

淡い初恋物語

【著者名】

N1689Q

【あらすじ】

少年は初恋をした。果たして少年の恋の行方は！？

本文より少し抜粋

今思えば、僕が小学校三年生の時。そう、あの時からすでに僕は彼女に惚れていたのかもしれない。まさに一目惚れだったんじゃないかと思う。だってそれは、一目彼女を見ただけで、胸がドキッと跳ね上がり、ついつい見惚れてしまっていたのだから。そして気付い

たら、目で追っていた。本当に今更、いや、今だからこそ添付く事が出来たんじやないかと思つてる。

(a r c a d i a にて投稿済み作品)

今思えば、僕が小学校三年生の時。

そう、あの時からすでに僕は彼女に惚れていたのかもしれない。

まさに一目惚れだったんじゃないかと思う。

だってそれは、一目彼女を見ただけで、胸がドキッと跳ね上がり、ついつい見惚れてしまっていたのだから。

そして気付いたら、目で追っていた。

本当に今更、いや、今だからこそ気付く事が出来たんじゃないかと思つてゐる。

走馬灯。

ちょっととした思い出みたいなものかもしれない。

今こうして彼女の事を考えるだけでも十分に胸が苦しく、頭の中は彼女でいっぱいになる。

それも、全てこの後の瞬間の為。

僕はこの後、今感じている以上の緊張感と不安感を抱くのかもしれないし、絶望と失望が僕を襲い、悲しき一生を過ごすことになるかもしれない。

でももしかしたら、逆に達成感と幸福感に抱かれて、さらにその先の幸せがたくさんの方を見出すことが出来るかも知れない。

分からぬ。

そうだ、全てがまだ分からない。

自分がちゃんと彼女に気持ちを言えるかも分からぬ。

だけど……だけども！

今まで……今までの三年間胸に秘めた思いを伝えなくてはもうチャンスは来ない。

これが最初で最後のチャンスなんだ……。

たぶん、僕の初恋。

初恋は叶わないとはいはけれど、そんな言葉関係ない。

僕は！ 僕は！！

この初恋が枯れるまであと……

この初恋が実るまであと……

彼女が僕たちの通う小学校　私立聖祥大学付属小学校　に転入してきたのは、小学校三年生の冬のころだった。

急な転入なうえに、この学校にやつてきた子は女の子。

それは飛び切りの美少女だった。

凜々しくも幼さの残る綺麗に整っている人形のような顔。腰にかかるほど長い髪をもち、太陽に光のように輝く金色のツインテール姿といい、あまりにも日本人離れしている女の子だった。

しかし、彼女のあまりの綺麗さ、可愛さに僕を含む男の子はみんな彼女が入ってきた瞬間に「おおおおお」と歓喜の声をあげるほどだつた。

その様子に彼女は少しひくりしたようだつたけど、すぐに自分がみんなに喜んで迎え入れられてるのに気付き、頬を赤らめしながらちょっと嬉しそうにお辞儀した。

か、かわいい。かわいすぎる。

僕の心中では、その言葉ばかりが浮かび上がり、気付けば自己紹介のために壇に上がる彼女をずっと見ていた。

みんなの前で話すことに慣れていないのか、それとも人前で話すのが苦手なのかは分からぬけど、最初は恥ずかしそうにして、ずっと下を向いていたが、決心したのか顔を僕たちのほうに上げ、

「あ……あの、フロイト・テスター先生と申します。よろしくお願ひします……」

頬を僅かに赤く染めながらも、弱弱しく、それでもほつきつと呟いた。

そのテスター先生の、必死な紹介に僕は思わず手が動き、拍手した。

みんなもそれに合わせて拍手をし、盛大な拍手によって彼女はこのクラスに出迎えられることになった。

そんな中で僕は、手が痛くなるほど精一杯に力をこめて、色々な感情をこめて最後まで拍手をして出迎えた。

テスター先生の人気はすごかつた。

その理由としては、この時期の転入生と言つもの珍しさと興味というのもだったが、それ以上に彼女の容姿が原因だったのではないかと思う。

みんな魅了されたのだ。

その輝く金色の髪に、綺麗な目を持つその顔に、儂げなその雰囲気に。

同じ金髪でも、どこかのバーニングさんは大違いだった。

正確にはバーニングさんだが、輝く金色の髪こそあれど、闘志に溢

れる燃えるような田と、血氣盛んな雰囲気しかない。

僕さ？ 彼女にはそんなもの期待するだけ無駄と言つもの。

それが僕たち男子勢の総意とも言えるもの。

ただ、僕はそれでも見てるだけなら綺麗なのにとは思つ。

綺麗な花には棘がある。

うん、彼女の為の言葉に違いない。

そんなバーニングさんは打つて変わって、同じ金色の髪を持つテ
スタロッサさんは大人しくてお姫様を想像させた。

一度自己紹介が終わり、休み時間になるとみんなが待っていたかの
ようにテスタロッサさんの下へと集まつた。

僕も行きたかつけど……あまり押しかけると迷惑かなと思い、諦め
た。

男女関係無しにみんなに囲まれて質問の嵐を受けるテスタロッサさ
ん。

そんな姿にみかねたのか、輪から外れていたバーニングスさんは席を
立ちみんなをまとめ始めた。

良くも悪くもバーニングスさんはリーダーシップみたいなものがあ
り、よくみんなをまとめれる。

なんだかんだで慕われているのがよく分かる。

「あれ？ 悠斗君は行かなくていいの？」

「え？ あ、うん。行きたいけど、迷惑かなって」

「フロイトちゃんはそんな」と思わないと思つよ？」

僕に話しかけてきたのは、高町さんと月村さんだ。

月村さんはかわいいと言つよつは綺麗と言つ葉がよく並てはまり、高町さんはかわいいと言つ葉がよく並てはまる。

月村さんやバーニングスさんはどちらかといつとお嬢様気質と言つ雰囲氣があるけど、高町さんはむしろ普通の町つ子つて感じだつた。

高町さんに関しては、自分の親が運営している翠屋といつ喫茶店の看板娘であるから、この表現は実にピッタシだと思つ。

実は僕も家族単位で、お世話になつてゐる喫茶店だつたりもする。

いつもこの二人と、バーニングスさんと一緒にいて、クラスでも有名なほど仲良し三人組だ。

「そんな、二人こそ何か聞かなくていいの？」

「こやはは、私はちょっとした知り合いだから大丈夫だよ

「私もなのはちやんと同じかな」

「知り合いだつたんだ」

いつたいどんな知り合いなんだろう?

気になることは増える一方で、自分もテスタロッサさんに色々と聞きたい衝動に駆られるがあくまで我慢する。

留学生といえども時間はまだあるだらうし、これからいつだつて聞ける。

チラッとテスタロッサさんを見ながら、そつ自分に言い聞かせる。

気付けば授業も終わり放課後になつていた。

たぶん気のせいだとは思つけれど、テスタロッサさんの事を考えていただけで、学校が終わつてしまつたよつた氣がする。

ただ、なぜ今日の授業に身が入らなかつたのか、自分でも不思議だつた。

家に帰つてからも、自分の部屋のふかふかベッドの上を『ひびき』と転がりながら、今日来た転入生のことを考える。

ああ、あれを聞きたいな。

これも聞いてみたいな。

でももし、すでに聞かれていた質問で一度目だつたら嫌だよね。面倒だよね。

じゃあやつぱり、誰も聞いてなさそうなことがいいかな？

なんでかな？ デリしていつも、考えることが楽しいんだろう。

学校から帰るときにも味わつた、授業に身が入らないのと同じような、不思議な感覚。

その不思議が不思議だった。

だけど、今この考える時間はこれもまた不思議と楽しかった。

楽しい日々の学校が、明日からまたいつそう楽しくなるやつな、そう信じて疑わなかつた。

この日は結局ずっと質問の内容を考えて眠ることが出来ず、翌朝は寝坊して恥をかいて学校に行くことになつた。

遅刻した事を友達にからかわれて、ちょっと散々な目にあつたが、そんな僕を見て高町さんと一緒に笑うテスタロッサさんの笑顔を見られたらそれもいいかなと思つた。

テスタロッサさんがケータイを買つたらしい。

買った理由は、高町さんたちに勧められたからそ�だ。

僕はケータイを持つていない。

僕のお母さんは買ってあげてもいいと言つただれども、お父さんは子供にケータイはまだ早いと言つよつな人で、僕はまだ持つていな。

僕もそこまで欲しいわけじゃなかつたから、お父さんに交渉とかはせず、すぐに諦めた。

何れは買つてくれるのはわかつてからだ。

その日になるまで待てばいい、そう思つていたのだが、今この瞬間にその思いは裏返つた。

僕も……欲しいなあ。そしたら、テスタークサさんともつとお話が出来るかも。

僕はテスタークサさんが来た一日以降、積極的とは言えないものの、それなりにお話をすることが出来た。

僕から話しかけると嫌な顔一つせずに、しゃべつてくれる。

そして、僕に微笑を見せてくれた。

その微笑が、普段以上に綺麗で初めて見た瞬間は、開いた口がふさがらなかつた。

そんな僕の姿を見て、テスタークサさんが慌てたりした。

なんで慌てたのか分からぬにかど、そのあとバーングスさんに叩かれ、よつやへ口をふらがべ」とが出来た。

その一連がちゅうと画面へ、ナスタロシカセスピ一緒に笑った。

とても楽しそう一時。

もしケータイがあればこんな楽しそう一時がもつと増えるんじゃない
か、僕はそう思った。

だから……お父さんに交渉した。

「駄目だ。お前にまだ早い！」

「で、でも……」

「でもも、何もない。それで前に納得したじゃないか」

「う……うう」

お父さんは変などうで頑固だ。

前から思つていたことだけじ、その思ひは確信に変わつた。

「まあまあ、お父さん。いいじゃないの」

「いや、納得したんだ。男として一晩はあるまー」

「ふふ、やつよな。でも、その一言を言つてでも頼むと『いい』とばかりなりに理由があるのかも知れないわよ。」

「……ふむ」

「せひ、悠斗話してみなさい。」

「うん……」

僕は欲しい理由を全部語つた。

改めて言つた内容を思い返してみれば、テスター・ロッサさんのことしか言つてないような気がするけど、きっと『のせいだ』。

話し終わると、さつきまで強固な姿勢で、絶対に譲らないといった雰囲気を出していたお父さんの様子が変わった。

「……恋、か」

「……？」

「春が来たのよね？ 悠斗」

「？ ？」

お父さんと母さんの「話題」とはよく分からなかった。

でも、この後一人は小声で少し相談すると、再び僕を見つめなおし、

「よし、分かった。買ってやる!」

「ほ、ほんとうに?...」

「ああ、かわいい息子の為だ。男には無いことはない、この場合は仕方ないな」

「ふふ、やうこひ」とよ。良かつたわね、悠斗

「うん。」

僕はあまりの喜びのあまり、大好きなお父さんと母さんに抱きついた。

それで何度も「ありがとう」「ありがとう」とまた呟いていた。

一人は僕を見て「春だな」とまた呟いていた。

今は春だよ? お父さん、お母さん。

最新機種のケータイを持って、学校へ登校した。

何とこのケータイ、写真はおろかテレビまで見えると言つ。

その説明を受けたときは驚きは隠せなかつた。

しかし、あとあと聞くと今は「これが普通らしいこと」だった。

今までケータイとは完全に無縁だつたので、まるで時代に取り残されていたような感覚に陥つた。

でも、そんな僕とは昨日おさらばで今では最新の、まさに流行の最先端を走つているような爽快感がある。

僕は学校に着くと迷わずテスタロッサさんの下へ行こうとしたけど、ちよつと躊躇つた。

「うじてだらつ……ケータイのアドレスを交換してもらつだけなのに、こんなにドキドキするのは。」

どうしようもない胸の高鳴りを覚えた為に、踏みとどまつてしまつたのだ。

聞いて大丈夫だらうか。

もし、聞いて断られたら。

いや、優しいテスタロッサさんに限つてそんなことは……

どうしても、最悪の事を考えてしまつ。

せつかく、せつかくケータイを手に入れたのに。

テスタロッサさんのアドレスを知つてもつと接する機会が欲しくて

買つたのに！

あれ？ 今、自分で少し不可思議な事を考えなかつただろ？

テスター・ロッサさんと接する機会のために買つた？

心の中、頭の中に疑問符が浮き上がる。

自分で自分がなにを言つてるか、考へてるか分からなくなつてきた。

……いや。今はそんなことよりテスター・ロッサさんと…

心の中で未だに葛藤が続く。

そんな葛藤も長く続き、気が付けば授業の時間となり、次に気が付いたときには学校が終わっていた。

そ、そんな馬鹿な。学校つてこんなに短かっただけ？

ありえない光景を目にしたような、そんな感情を抱いたものの、この放課後の時間がチャンスだとすぐに気がついた。

肝心のテスター・ロッサさんはどこに、そう思い回りを見渡せば、都合よく彼女一人だけになつていた。

いつもな高町さんたちに囲まれていてとても話しかけられるような雰囲気じゃないのだが、災い転じて福となすと言つのだらうか。

まさに千載一遇のチャンスだった。

「…」を逃せば自分はもう一生彼女とのアドレス交換ができない。

そう思い、一大決心してテスターを近くに近づく。

「あ、あのう……」

「？ あ……おうと、じつしたの？」

いつもと変わらぬ優しい顔で、反応をしてくれた。

思わずその姿に、毎度のことながら見惚れてしまつたが……いけない、そんな時間は無かった。

17

「あ、あのね！ えっと……アドレスを「あざれす？」

「け、けケータイの…」

「……あ、ゆうとケータイ買つたの？」

「え？ ああ、うん。」「これ…」

気が動転する。

今にもめまいが襲つて倒れそうなほど、クラクラする。

だけど、ここで頑張らなくては手に入らない。

「あ、アドレスを交換してして下さい。」

「…………」

一瞬の沈黙だった。

僕は思わず深く頭を下げて、お願いをしていた。

まるで告白するような、片手からみればそつ見られてもおかしくなかつたほどだった。

「うん、いいよ。交換、しよ?」

「え、あ……うんー、本当にここの一?」

「友達……だから」

「そ、そつか。友達だもんね」

テスター口ッサさんとの了承の言葉。

その言葉に僕は、感激のあまり逆に聞きなおしてしまった。

そして、次にテスタロッサさんから帰ってきた答えは「友達だからこの言葉に、僕は……僕は！」

予想だにしなかったテスタロッサさんの言葉に、さうに感激は高まる。

しかし、感激のあまり180度ひっくり返り返り、冷静になってしまった。

でも、この言葉はどんな言葉よりも心に響き、たぶん一生忘れることは無いと思つ。

僕はこの感激の高まりのウキウキ気分のまま、軽くステップまで踏みながら家へ帰つた。

そして、お父さんとお母さんとの勢いのまま報告した。

その僕の様子を見たお父さんとお母さんは、お互に手を合わせ「青春だな」「青春ね」と呟いた。

部屋に転がり込み、ベッドに勢いよく身体を投げる。ベッドのバネで一回高く飛び跳ねた。

心はまだ浮かれ気分。そして、そこに更なる追撃が来た。

テスタロッサさんの初メール。

その日、あまりにもテンションが上がりハイになってしまったため、今の記憶にさすのメールの内容はあまり覚えていない。

「おまえ、テスター卿はおまえの一人だ。

「……はあ？」

テスター卿は、初めて会ったから三年。僕はすでに六年生になりました、来年からは中学生だ。

この学校は中学になると共学ではなくなり、男女別になる仕組み。つまり、テスター卿は共学で一緒になるといふことです。されば、かしこうがなことだった。

それは、非常に残念なことなのだけれども、こればかりしまじょあじやないの？」

「好きとか……そんな

「あ、真面目に考へるなよ。からかってただけなのだ

「……ああん？」

「こわつ！ 普段大人しいやつは怒ると怖いね！ 何するか分から
ないよ」

僕をからかいに来ただけの、一年生以来の親友をにらみつけると、
「ああ怖い怖い」と言いながら、自分のクラスへ帰つていった。

しかし、彼の言つた言葉は胸に突き刺さつた。

『テスタロッサのこと好きじゃないの？』ね。僕だって、分か
らないよ。

三年と言つ月日は、人生の中では短くも小学生である自分には長い
月日。

そんな月日の中、僕はテスタロッサさんと接し続けた。

学校ではもちろん、メールもしたり、電話だってするほど仲がよく
なつた。

高町さんたちの次ぐらには、仲が良いと胸を張れるくらいの仲だ
と思つ。少なくとも僕は。

三年でテスタロッサさんの身体は、あの……その……えっちいのは
いけないとは思います。

ええ、僕の口からはいえないほどの……あれになつていた。

それでも、僕の中でのテスタロッサさんは変わらず綺麗でかわいか
つた。

そして、

「あ、おひと。おひと？」

「お、おはよー、テスター・ロッサさん」

昔にかわらず、僕の胸はテスター・ロッサさんと会うだけで、ドキドキと心臓が鳴り、話せば緊張して顔が熱く感じる。

彼女の事を考えれば、今も胸は張り裂けそうに痛くなる。それでも考えることは止められなかつた。

「今日は早退とかしないの？」

「うーん。たぶん、大丈夫」

テスター・ロッサさんには秘密が多い。

それは僕が未だに、三年生のとき聞いたかつた質問を聞けていないからかもしれないが、テスター・ロッサさんは……いや、テスター・ロッサさんと高町さんは時々学校を休んだり、早退する。

それが一番の謎なのだが、女の子は謎が多い方がいいと囁つた母さんの言葉もあるので聞くことは無い。

「やつか……うん、そつか」

今日せようと学校で一緒に教室で勉強でやると頼つと、ここでよハ
ンシヨンは上がる。

でも、こんな時間が続くのは今年限り……なんだよな。

諦めてこるとは言へども、どうしようもなこととは分かっている
ものの、やめにじりか……悲しかつた。

あるこは、残念。

それはどうしてなのか……

もしかして、僕つてテスターささんのことか……?

三年前では分からなかつたこの感情の正体。

思ひ当たる節がある。

よくお父さんとお母さんが呟いていた言葉。

もしかして……まさか……「これがー?」

そう考へると、頭は彼女のことやこいつぱいになら、心臓はよつこつ
そつ早く脈を打つ。

眉でも立つてもこられなかつた。

チラリとテスタロッサさんのまつを見る。

今は授業中だとこいつのこ、僕の視線に気付いてかテスタロッサさんもこいつを見て、にこっと笑う。

僕は思わず顔をそむけてしまつ。

しかし、ようやく分かつたこの気持ちに確信が持てた。

思わず、一人誰にも聞かれないようにぼんやりとそばへ

「さうか、そうだったのか……はあ、あいつの言つていたことは、あつてたのか

一年生以来の親友の言葉を思い返し、もう一度深いため息を吐く。

テスタロッサさんがここで来てくれるだろつか？

僕はちゃんとここの想いを言葉で伝えられるだろつか？

いいよ、と頷いてくれるだろつか？

拒絶されてしまうのでは無いだろつか？

様々な憶測が頭の中で飛び交うがそれに答えてくれる者は居ない。

あえて言つのであれば、その結果を教えてくれるのは彼女　テス
タロッサさん意外には居ない。

僕にとってたぶん初恋の相手。

僕にとって初めての恋。

僕にとっての……

いまだ来ぬ彼女にどう言おうか考える。一応、台本は用意した。だ
けど、実際にそれがいえる保証は無い。

果たしてどんな答えが返ってくるだろうか。

反芻する思惑と憶測。

それを考えるたびに、倒れてしまいそうになる。

眩暈がする、吐き気がする、フラフラになる、今にも涙が出そうにな
る。

答えを知るのが怖い。

でも、知りたい。

矛盾する考え方の思い。

そんな葛藤を人知れず、抱いていると、よつやく。

僕にとっては何ヶ月も待っていたんじゃないかと思ひほどの時間を感じて、やつと彼女がやつてきた。

「「」ぬんね、わざわざ呼び出しだ」

「「」ん、大丈夫。ゆうと、大切な話って何？」

「あ、あのね」

台本のセリフがぶつ飛んだ。

頭の中が真っ白になる。

さつきまであんなにも、あんなにも考え、葛藤していたのに、全く何も思い浮かばない。

言つなれば、放心状態のようだった。

だけど、言わなくては、伝えなくてはといつ焦りだけが浮かぶ。

「じ、実は二年前から……」

よつやく出てきた言葉。

しかし、ついられた言葉は甘口ではなくて、テスターの言葉。
思い出話。

それも、僕の中の彼女のとの思い出。

その重いでは彼女にとつては思い出かも分からぬ、知る由も無い。
でも、僕は語る。

長々と、三年間を。

初めて見た時とのこと、ケータイの裏話、テスターの運動
神経に驚いたことなどなど。

『できる』こと無かった。

テスターはそんな僕の話を、微笑みながら聞き、時々相槌
を打ってくれる。

そして、ようやく語り終える。

「テスターとの時間はとても楽しかったんだよ

「うそ、私もやつとと一緒にいると乐しこよ」

その言葉は最大の名誉であり、僕が感極まるのには十分な言葉。

だけど、違う。

そんなことじやない。

僕が今日ここにテスタロッサさんを呼んだのは「こんなことじやない。

一度目をつぶり、深く深呼吸。

そして、叫ぶ。

最後の、最後の力を振り絞つて。

あのとき、初めて会ったときにテスタロッサさんに精一杯の拍手をした時のように思い切り力を言葉にこめて、

「僕は……テスタロッサさんのことが

(後書き)

この後の恋の行方は、みなさんの想像にお任せします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1689q/>

淡い初恋物語

2011年1月19日01時21分発行